

## P2-034

### 道具の違いによる乳幼児の水分摂取時の下顎運動に関する縦断研究

刑部 月<sup>1</sup>、石崎 晶子<sup>1</sup>、大杉 佳美<sup>2</sup>、板子 絵美<sup>2</sup>、大岡 貴史<sup>3</sup>、弘中 祥司<sup>1</sup>

<sup>1</sup>昭和大学 歯学部 スペシャルニーズ口腔医学講座

口腔衛生学部門、

<sup>2</sup>ビジョン株式会社 中央研究所、

<sup>3</sup>明海大学 歯学部 機能保存回復学講座

摂食嚥下リハビリテーション学分野

#### 【目的】

乳幼児期は摂食機能発達が著しい時期であり、成人嚥下や咀嚼機能獲得とともに水分摂取様式も哺乳動作から変化する。本研究では、乳幼児期の道具の違いによる水分摂取に関する下顎運動の発達変化の解明を目的として、乳児の水分摂取時の下顎運動について縦断的観察を行った。

#### 【対象と方法】

対象は健康な生後11か月の乳児12名（男児7名、女児5名）とし、18か月まで月1回の頻度で水分摂取の様子を評価、撮影した。撮影には、外部観察評価のための家庭用ビデオカメラ2台用と、下顎運動の移動距離計測のための三次元動作解析カメラ2台を用いた。解析対象点はオトガイ部（A）と顎下部（B）とした。水分摂取に用いた道具は、市販の乳児用スプーン、スパウト、ストロー、トレーニングコップ（以下コップ）の4種類とし、各道具が口腔内に挿入された長さを計測した。研究実施に際しては、昭和大学歯学部医の倫理委員会にて承認を得た（承認番号：2014-028）。

#### 【結果】

各道具を用いた水分摂取時のオトガイ部（A）、顎下部（B）の平均移動量は、生後11か月ではスプーン（A）2.19cm（B）2.09cm、スパウト（A）1.81cm（B）1.80cm、ストロー（A）1.85cm（B）1.88cm、コップ（A）2.29cm（B）2.20cmであった。18か月ではスプーン（A）2.20cm（B）1.76cm、スパウト（A）0.66cm（B）0.53cm、ストロー（A）0.45cm（B）0.39cm、コップ（A）0.94cm（B）0.83cmであった。また、口腔内に挿入された道具の長さは月齢間での変化は見られず、8ヶ月間の平均は、スプーン1.7±0.6cm、スパウト3.0±0.3cm、ストロー2.5±0.3cm、コップ2.0±0.5cmであった。

#### 【考察】

生後11か月と18か月の各道具の移動量を比較すると、スプーン以外の道具では移動量が減少した。これはこの月齢間において頭部、顎が安定されてゆくのではないかと考えられた。また、スパウト、ストロー、コップは口腔内に道具が一定長挿入されることにより、姿勢、頭部、顎が安定し、早い月齢から簡単にこぼさず自分で上手に飲むことができると考えられた。スプーンは他の道具に比べて児の能動的な動きが促されやすいため、上手に飲むためには練習が必要であると考えられた。更に、水分の量の調整やスピードなど、介助者の技術に影響を受けると考えられた。従って、水分摂取機能の発達を促すには、スパウトやストローだけでなく、頭部、顎の安定から、スプーンやコップ飲みの練習をすることがより適していると考えられた。

## P2-035

### 父親の育児ストレスとソーシャルサポートに関する文献検討

尾近 千鶴、藤澤 真沙子、菊地 珠緒

川崎市立看護短期大学

#### 【目的】

父親の育児ストレスとソーシャルサポートに関する文献を検討し、研究の動向から今後の課題を明らかにする。

#### 【方法】

医中誌をデータベースとし、「父親の育児」「ストレス」をキーワードに2001年から2015年までの文献検索を行い、41件の文献を得た。このうち1) 重複文献の除外、2) 父親対象の研究、3) 日本での研究、4) 健康な子供をもつ父親を条件とした9件に絞り、父親の育児ストレスについてまとめた。そこから父親の育児ストレスとソーシャルサポートの関係をみた5件について研究の動向を分析し、今後の課題を検討した。

#### 【結果】

5件の文献は、0歳から7歳までの主に乳幼児を持つソーシャルサポートを受けた父親を対象とし、質問紙を用いた調査方法であった。また「父親への教育プログラムを実施し効果を見たもの」4件、「父親の育児サークル参加の効果を見たもの」1件に分類された。これらのうち「ストレス測定尺度」と「父親になることによる発達尺度」の両方を用い効果を見たものが2件、日本語版育児ストレスインデックスを用い効果を見たものが1件、育児・家事時間、性別役割と子ども観の経時変化を見たものが1件だった。結果は、4件とも教育プログラムによる介入で父親の育児ストレスの軽減がみられた。プログラムを3回以上行った場合に育児ストレスが有意に低下していたものが1件、母親が産院を退院した1か月後の「父親の家事時間」に有意差があったものが1件だった。「父親の成長」「育児の自立」などで6ヶ月後・1年後に、より効果がみとめられたものが2件、「父親の居場所・仲間意識」に関するものが2件だった。また、育児支援サークルの効果を見た1件からは、「父親の仲間作り」「子育て中のリフレッシュ時間」「性別役割分業」「父親の成長」が抽出された。一方で、父親は世話役割と仕事との葛藤があることも示唆されていた。以上、分析からソーシャルサポートを通じて、父親は育児ストレスを軽減したり、父親としての成長をとげることが示唆された。

#### 【考察】

育児ストレスとソーシャルサポートの関係をみた研究は試作の段階を経て徐々に増えている。研究の課題として、対象が少なく一般化するには限界があること、父親のストレス軽減や、父親としての成長をはかれるようなソーシャルサポートのプログラム内容や介入時期についての検討が必要であることが明らかになった。